



関西 ECOMAIL

第23号

第37回 関西ワークショップのお知らせ

日時： 1994年10月15日(土) 午後2:30~5:00

話題提供：

ST S 教育教材「水俣病」と 環境教育開放講座

塩川哲雄さん 大阪府磯島高校

環境科学、科学/技術/社会(STS)、意思決定の三つの側面から、水俣病を取り上げ教材を作成、授業を実践されたご経験、さらに今年から始められた環境教育開放講座について、おはなしいたします。

会場：大阪教育大学(天王寺キャンパス)

(JR環状線寺田町駅下車 西へ徒歩3分、または天王寺駅下車 北東へ徒歩7分)

問い合わせ先：大阪教育大学環境科学教育研究室 (☎ 0729-76-3211 [内線 3127])

日本環境教育学会関西支部第3回研究大会 — 研究報告募集 —

日時：1994年12月10日(土)

会場：大阪教育大学柏原キャンパス(大阪府柏原市)

会員の研究報告(テーマは特に指定しない)を募集します。研究報告の題名、報告者名(共同報告の場合は、代表者を明記)、連絡先(電話番号も)、その他必要と思われる事項を葉書に書いて、10月末までに事務局(連絡先は最終頁にあります)へお送り下さい。また、報告に必要と思われる時間の長さもお知らせ下さい。報告時間の長さについては、当日の報告者の数により世話人会で調整させていただきます。自主的なワークショップやシンポジウムの企画については、事務局に直接ご相談下さい。当日のプログラムについては、決定し次第お知らせします。(関西支部世話人会)

『言葉』からの環境教育 ④

小学校国語教育最前線

北村 直也(寝屋川市立中央小学校)

先日、5年生の我クラスにヒヨドリが1羽、3時間ほどだが「入院」していた。ヒメリンゴの木を消毒した後、下に落ちた毛虫を食べたらしく弱って落ちていた。学級の数名の女の子達が箱に雑巾をしき、ヒヨドリのために特別の簡易ベットを作り寝かせた。私達には最初なす術もなく見守るだけであったが、スポイトで私が与えた水を少しずつ飲んでから徐々に元気になってきた。少し時間を置いて2回目に与えた時ギャーギャー鳴いて水をのみ、さもいまいましそうに私を睨み付けてから、よたよたしながら窓から外に飛び出してしまった。その後、学級の中は笑いの渦であった。しかし、この1羽のヒヨドリが私達に残してくれた「感覚」は強烈なものであった。ヒヨドリは生きていた。自分の生きる主張を持ったものであった。1つの命の存在が子供達に残った。

我が家に2年ほど前から、人から押し付けられて仕方なしに飼っている手のりのセキセイインコがいる。これも自己主張の塊であり、私の姿を見れば鳴いて呼び、籠から出してやれば肩や頭にとまって甘えてくる。あのような一粒の鳥でさえ1個の「感情」の大きな塊そのものである。自然の鳥たちの世界においても同様な精神世界が当然のこと存在するのであろう。

ヒヨドリがいなくなった後、三行詩(五七五詩)を早速捻ってみた子供達。

(ひよどりを上の句にして)

- 1、ひよどりがおなか痛い飛んでいく (K・D)
- 2、ひよどりは人間きらいになったかな (A・O)
- 3、ひよどりちゃんよかったよかったよかったね (R・M)
- 4、ひよどりにお帰んなさいと仲間たち (Y・M)

現代の子供達の遊びの中心に座っているファミリーコンピュータの世界が、閉塞世界だとよく言われる。一つの世界の中で、同じようなパターン操作を繰り返す。一見能動的に関わっていくように見えて、答えは用意されており受動的にならざるを得ない。それはなにもファミリーコンピュータだけに言えることではなく、現代社会が持つ病理の現実なのである。子供達は生ある物たちとの交流の中で体と精神が共鳴し震えることがほとんどない世界で成長していく。この様な社会状況が今後も続き、いやもっと自然界と切り離されていく中でヒヨドリの顔を覗き込み、その心の痛みや叫びをその様子や声の調子から分かるようになるであろうか。ヒヨドリは物ではない。心を持った生き物なのである。

小学生という柔らかな心の時にこそ、この様な生き物たちとの心の交流を多くしてほしいものである。それを感じたからこそ前述したような三行詩が生み出されていく。「言葉」がその時に果たす役割は本当に大きなものである。もやっとしていた感情が心の動きが、言葉というはっきりとした形をとって私達の眼前にその姿を見せてくるのである。さらに、それが、よりその心情を深く捕らえたものであった場合、逆によりそれが感情を揺するものになってくる。「ひよどりちゃんよかったよかったよかったね (R・M)」などは、この子にとってこの言葉が心の中から飛び出てきたのである。じっと心配そうにヒヨドリを見ていたこの子ならではの詩である。言葉を支える心の世界そのものである。そこから人間と自然の豊かな温かい関わりだけでなく、人間同志の中で今おろそかにされている事、本当に必要とされることがあるように思う。

今日、地球規模での環境問題、企業城下町での特定地域から被害者と加害者が同一である都市生活型への公害、国境を越えた国際的環境問題等多くの課題を抱えている。又、先人より預かり受け継いだこの地球を安全に未来の世代に引き継ぐ責務を果たせるかどうか。すべて一人一人の正しき理解や認識と共に配慮ある生活行動に懸っていると思う。環境問題は研究、学習、報道等着実に効果をあげているが、未だ無関心や実践しない人、技術やお金で対処すればいいと考えている人も多くいるのが現状である。科学技術、課徴金等の経済負担、法制的な規制や処罰も有効な手段であるが地球人としてあるべき社会規範の確立と自制的な自己判断や行動が根本解決であると思う。その為、多少時間がかかっても環境教育に期待をかけた

い。

省資源、ゴミ減量等のためのリサイクル運動が推奨されている。何の為にリサイクルが必要なのかは環境教育の場では教えられているが回収活動は果たして有効なのか、回収しなくても良い社会生活が出来ないかに就いてはあまり論議の対象になっていない様に思う。例えばアルミ缶はアルミ新地金の30分の1の省電力であるから空き缶回収は環境保全に役立っていると言う。総合的にみて本当にそうであるか、教える側で与えられた情報をもう一度洗い直して教えているのか、疑問に思う。わが国での排出物処理は技術重視で、埋め立て-焼却-再資源型リサイクルである。欧州では消費抑制-必要消費-使用回数延長の再利用型リサイクルである。そもそもアルミ缶からの再生地金（純分95%）と電解新地金（99.99%）を同列に考えることが問題のすり替えである。又、自動販売機からの電力や物の無駄使い、健康面や少年非行等波及負荷は計り知れない。それに溶解回収率約75%で残りは鉍碎として廃棄される。同じことは牛乳パック故紙、ペットボトルにも当てはまる。我々は利便性、効率を大事に考えて

もきたし必要なことである。大量生産－使い捨て経済以前の昔は故紙、故金属、故繊維は資源の概念ではなく貴重な原料として自然循環システムの中で市場原理が働いて大切に回収されてきた。今や強制循環システムの中で回収され市場構造そのものが破壊されてしまった。リサイクルは必要であるが、焼却よりましであり場合によれば廃棄の方が負荷の少ない場合もあると認識すべきである。

よく自分の考えは唯一無二であり、絶対であると考えて相対性に乏しい研究者や教育者が多く見かけることがある。勿論、自分の価値観や理念に自信を持って貰わねばならないし、それなりの根拠はあると有ると思う。しかしながら自分と対立する立場、例えば行政、企業等の考え方を良く聞き、行動の姿勢を相手の立場から見る心の余裕と理性は必要に思える。その中に自分には判らなかつた正しい真理が有るかもしれない。すべからず教育、研究にたずさわる人は他に配慮し、過ちがあれば改める位の寛容性がほしい。自己内省が自己進歩と心得るべきである。脚下を照顧することも大切ではないだろうか。

教育効果について結果重視は考えねばならない。結果は大切であり、結果の出ない努力は無に等しい。しかしこだわる事は必ずしも良いとは言えない。普段の絶え間ない地道な努力が積もり積もっていつしか実るものである。教育とはそんなものと私は承知している。結果を急ぐとどうしても科学技術に頼ったり、強制的に組織の網を被せ勝ちになる。組織の網は個人の自由な発想や価値観を無視し喜びは感じられないし、科学技術の解決は部分的一時的である。持続的恒久的な解決のためにはそれぞれの人々が正しい理念の下に一人が一人に伝え、訴える事により全体が良くなる波及的な手段方法が良いと思う。

片方やある部分の立場や論拠を強調し過ぎるのも問題であり、片寄った教育になる恐れはある。批判精神は必要であり進歩も生む。問題提起には自己と対称的な反対の考え方も同じレベルで討議すべきである。即ち問題提

起には正も負も零も同じ俎上に乗せるべきである。環境教育は有りの儘の姿、実情を公平に示すべきである。例えば、有機無農薬栽培農作物は環境に良いと言われており、事実、健康にも良いし必要な事である。しかし、過去の残留農薬の危険性、安価かつ需要を満たすだけの大量供給の困難さ、寄生虫疫病の危険性他難題を抱えている。国の基準を信じ、安価で保存性の高い化学肥料農薬使用の農産物を求めるか、或いは高価で保存が困難であるが安全で健康に良い無農薬農産物を買うかは消費者の選択に任すべきと思う。

科学技術で起きた環境問題は科学技術では解決出来ない。部分専門分野で可能であっても隣の領域で新たな違った形での負荷を与えている。科学技術は対症療法であり根本治療は出来ない。皆さんご存じのエントロピーの法則、特にエントロピー増大則から考えるとあきらかである。古人は経験則より自然循環機能の中でしか環境は良くなる事を知っていた。自然環境で浄化しつつましく生きてきた。我々は経済優先、急激な進歩の中で大切な自然の摂理を忘れてしまった。

自分の欲望を満たすために他人の利益を損ってきた。地球上の一部の人間が大多数の人々の犠牲の上で豊かさを謳歌してきた。開発途上国の人々がせめて我々の生活水準に近づきたいと願っても何等不思議でもない。我々も水準を下げ両者は交わらねばならない。縮小は拡大より努力がいる。せめて10年乃至20年のタイムスリップは出来ないか。科学技術が悪いのではなく、急激な進歩と経済に結びつき頼り過ぎるのが問題なのである。利便性、経済性より環境保護は優先すると思う。環境保全と開発は二者択一ではない。環境保全が優位にある調和が望ましい。個人、学校、地域社会、企業、行政がお互い協力し、未来と現在のために環境に配慮しつつ、創意工夫に努め行動や態度を自ら律して行かねばならない。

以上私の感ずる所を述べてみた。原稿を書きつつ自分自身を叱り、教えている思いである。皆様には、反論が有ると思う。忌憚なき御批判を乞う。

自己中心的エコロ人 (これでもエコロ人...?)

本庄眞 (奈良環境教育研究会・奥吉野自然研究会、奈良県内の小学校に勤務)

[妻の目から]

- ・だらしない。(具体的に、物の片付けが悪い。物忘れが激しい。あの汚い住所録をなんとかして下さい。時間がルーズ。この頃は、全くあてにしないことにしました。人前で屁をやらないで下さい。)
- ・文章をまめに書く→12歳から25くらいまでの日記を読むと、なかなか面白い。しかし、まめに書くわりに、文章に穴が多い。
- ・山が趣味。山陰は、大山の麓、標高350mのところを18年を過ごしたようで、ここに、原点があるとこの頃やっと分かりました。大山と近くに見える日本海を見て育ち、これが、お金がなくとも、東南アジアに運ぶ源のようです。東南アジアに行くとホッとて、気分が落ち着いているようです。現在、三角点200をやっと越えたそうです。東海、岐阜、鈴鹿の山→奈良は奥吉野の山→すべては、住居の位置とお金の相関関係。約10年、最晩年の今西錦司氏を吉野の山に案内するようになったのは、山で飲む酒を忘れてしまったことによるらしい。道は、自分で創っていくものだとわかったようです。以来、まともな道より藪こぎが大好き。死ぬまでに、700ぐらいを目標を置いているようですが、これは無理でしょう。この延長線に、カモシカ調査や自然塾(奥吉野自然研究会)もあるようですが、少人数で細々やっているようです。山から帰ってくると生き生きして帰ってきます。農学部林学科の出身。卒業した大学農学部における記念すべき小学校教師第1号、新しい道を開拓したのだと自慢していますが、在学中は女性を求めて文学部などに通っていたようです。農学部が農民のことを少しも考えていないと憤慨し、森林生態学が微分方程式になるのを反対していたようですが、ただ自分の算数嫌いが最大の原因なのに、それを棚に上げている。全く情けないと思います。
- ・川は、仕事。奥日光調査行のジャンケンに勝ってしまい、以来16年、川との付き合いがスタートしたそうです。川の魅力は一体何なのでしょう？分かりません。川の生き物だけでなく人間(民俗)と川のつながりなどにも魅かれています。川に入っていました。母子家庭の暮らしも、慣れっこになってきましたが、少しは父親の自覚をもって下さい。
- ・科学と人間。「環境教育は、文明教育」というお話を聞いて以来、今まで環境教育を斜めに見ていたのを若干変更させてくれたようで、大阪や神戸にせせと運ばせる原因のようです。酩酊して帰宅するのは、12時半。この頃は、もう待つのはやめました。
- ・教育は、山。なかなか、そう簡単にはいかないように見えます。子どもが楽しむより先に、自分が楽しもうとしているので、ハラハラドキドキ。回りの先生が全く気の毒に思えてきます。奈良環境教育研究会というのを4年ほど前につ

くったようですが、道楽としか思えません。学生時代から暖めていた人間の
ための教育（学問）・素人の学問所というのがテーマのようです。自分が話を
聞きたいと思う人にいそいそと電話をしています。会を主催している自分
が1番楽しんで、回りの人のことを全く考えていないようです。
・以上を総合すると、ECOLO人などとは、とても言えないと分かります。

本庄 貞先生



ほんじょう まこと さん

その企画力、行動力、そして調整力に定評の
ある本庄先生。学校で、学会・研究会で、
野外で、環境教育の取り組みに大活躍中。
そんな先生は、やっぱりそれでもエコロ人！
(似顔絵は、かたおかまいさん作)

ディープ・エコロジー、環境教育、そして私

藤公晴 (ディープ・エコロジー・リソース・センター)

自己紹介： 始めまして、ディープ・エコロジー・リソース・センター（DERC）の藤
公晴です。6年間のアメリカでの留学生生活を終え、11月に帰国し、1月にDERCを
設立し、その名の元に様々な活動を行なっております。

私のバックグラウンドについて自分で言うのも何ですが、極めて有機栽培的であると思
います。大学での専攻は自分でデザインした "Natural Resources Economics and Po
licy (自然資源に関する政治経済)" で、森林生態学を中心に幅広く社会科学系（政治、
経済、社会学・理論、歴史、環境倫理、地理など）の勉強をすることができました。課
外活動では、リサイクル運動のディレクター、ヨットのインストラクター、そして学生自
治会の委員などを通じて色々なことを学ぶことができました。趣味のほうでは、山登り
・歩き、自転車、水泳、シーカヤック、スキーなどの冒険的遊びに熱中しております。

またディープ・エコロジーとの関わりについては、4年程前に始めて、ディープ・エコ
ロジーの先駆者として知られる、ビル・ディボル教授の論文に出会い、その後、教授のお
られるカリフォルニア州立大学に移り、教授の書生として日常生活を通じて様々なことを
指導していただきました。

環境教育とは： この事に関してはよく教授と意見を交わしますが、私にとってそれは、
"大自然と人間が深くつながり合い、一体であるという感覚を養い、拡大する機会" であ
り、また違う言葉で表現すれば、"巨大合理化社会に生まれ、そこに生活の場を置く私達
の人間性を本質的に問い、癒す機会" でもあると理解しております。

私達のほとんどは、五官六根を生まれたときから死ぬまで持っているわけですし、それ
ぞれの生まれ育った環境や土地、年齢層も違うわけですから、当然、その機会は、多様な
アプローチにならざるを得ないでしょう。具体的には、特定の1-2時間や週末に行な
う教育プログラムだけに限らず、家族や友人との一言一句に始まる日常会話から、長良川
河口堰の建設反対運動、グリーンピース等の環境保護団体による社会的・政治的運動まで、
私達のとる社会的行動のすべてが環境教育に深くつながっていると認識しております。

その事を頭の隅に置きながら、DERCの活動内容を慎重に選んでいるつもりであります。こんな偉そうなことを言いましても、まだ始まったばかりで私自身経験不足でありますし、自費でやっている状態ですから、活動の規模は本当に小さいものです。

DERC活動内容：正直に言いますと、そもそもDERCとは、私が肩書き大国—日本でディープ・エコロジー運動を行なっていくために創立したものであります。前にも述べましたように、その活動の規模は小さく、読者の方々は“DERC=私自身の単独行動”と想像されるかもしれません。しかし、このたった十カ月ほどの短期間にたくさんの人々と生き物にお世話になっており、そのお世話によって成り立っているということを皆さんに伝えておきます。

現在までの主な活動例は、1) Introduction to Deep Ecology (ディープ・エコロジーの紹介)、No.1 自費出版、2) 1995年 エコカレンダー(京都J. E. E.) 1月分メッセージ作成、3) 論文執筆 “ディープ・エコロジーとは” 『自然人』93年3月号 未来委員会発行、4) 日本の伝統文化に基づく自然観研究、信州、岡山、兵庫における実地調査、5) 分担執筆(今秋出版) 『自然との共生をめざして』—編集・岡島成行 (株)ぎょうせい、などです。

現在取り組んでいる活動は、1) 分担訳『ディープ・エコロジーの思想(仮題)』アラン・ドレングソン、井上有一(共編)、2) 日本におけるクリアークット・エデュケーション・プロジェクト(森林壊伐に関する教育プログラム)の企画・構想、3) 詩集『一粒の砂』自費出版、発表・展示会企画(11月末予定)、4) 北アメリカのディープ・エコロジー運動に関する研究・情報入手(6月15日—9月12日)、5) 今秋、10月15、16日(一泊二日)に予定している“ディープ・エコロジー、エコロジカルセルフ ワークショップ”の企画等です。このワークショップに関して、興味をもたれた方は至急、DERCまでお知らせください。(連絡先は、ネットワーク欄を御参照ください)

最後に一言：現在、日本で起きている政治(国家)混乱は、何が未来の世代(この場合、人間以外の生命も含む)にとって一番有益なのか、という永遠の疑問を無視し、個人の一時的な経済的・社会的立場につい執着してしまう、日本人の虚しい国民性を明白にした象徴的事実であると認識しております。

こういう風に現実を表現すると、すごく悲しい響きがあり、常に世のため人のためと宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩のような活動しなければ、と思いがちですが、ディープ・エコロジー運動の支持者たちは、大自然の中でゆっくりと時間を過ごし、心から楽しむことを忘れません。良い植物を育てるには、まずよく肥えた土を用意する事が大切なので

いつか読者の方々と、大自然のなかでひと時を過ごせる機会があればいいなあ、と思っております。



とう きみはる さん

6年間の滞米を終え、昨秋、日本社会に復帰! 自らのひととなり、生活姿勢にディープ・エコロジーの価値観を反映する藤さん—21世紀の環境教育を担うスケールの大きなエコロ人。

＜紹介＞ アジア環境教育フォーラム準備委員会

アジアの環境と開発の現状は、人口増大と都市化（現在：30億→2025年：46億）（都市人口30%→50%）、急速な経済成長とエネルギー消費の増大（全世界に占めるアジアのエネルギー消費量は2025年に1/3となり世界一のCO2排出地域になる）、多様で脆弱な生態系の危機（森林減少、土壌劣化、越境汚染）による環境問題と経済格差の増大です。アジアの国々の相互依存性は深まり環境問題解決のための協力の必要性はかつてなく高まっています。

「アジア環境教育フォーラム」の基本的な目的は、日本とアジアの共通の未来を語り合い、＜環境と開発＞についての日本の人びととアジアの人びととの共通理解を築き、それを実現していくために果たすべき環境教育の役割について明らかにしていくことです。

これまでの話し合いの中では、アジアにおける環境教育のネットワークづくりに向けて、各国各地域の現場の課題や担い手（NGOなど）を調査してダイレクトリーをつくり、サポートし合っていく対象や課題をしぼり、2年後から3年後くらいに開催する会議への参加を呼びかけていくという方向が出されています。

そのためにはとりあえず「アジア環境教育フォーラム準備委員会」とその事務局をスタートさせ（事務局長はとりあえず森が担当）、助成金集めやダイレクトリーづくりにとりかかっていくことになりました。（パソコン1台とアルバイト1名が必要）。

わたしたちは＜環境と開発＞についての南北協力の事例として、オランダの市民、自治体、政府のすばらしい試みをすでにモデルケースとして持っています。「環境問題を将来の世代に残さないためには現在の生産消費様式を変えることによってしか達成できない」（オランダ国家環境政策＜追加＞＝NEPP-plus）

日本の市民、自治体、政府はどのような協力関係をアジアの人びととともに築いていけるでしょうか。そのために必要な、情報や提案、協力を提供してください。

アジア環境教育フォーラム準備委員会に参加・協力していただける方は、当面の連絡通信費として、後ほど2000円を郵便振替口座に振り込んでください。なお、振り込みがあった方は準備委員会の名簿に掲載し、ミーティングのお知らせ、議事録や関連資料をお送り致します。皆様の参加・協力をお願いいたします。

アジア環境教育フォーラム準備委員会（五十音順、敬称略）

秋吉博之（兵庫）、阿部治（埼玉大教育学部）、泉貴久（専修大学松戸高校）、岩崎裕保（京都芸術短期大学）、上田啓子（東和大学国際教育研究所）、内山真義（千葉）、遠藤康子（環境教育ネットワークとちぎ）、大島順子（フリー）、河村信治（カメラマン）木俣美樹男（東京学芸大学）、小菅盛平（和光鶴川小学校）、小寺正明（環境国際研究会）新川加奈子（富士フェニックス短期大学）、杉原輝明（京都）、竹内一雅（(株)ニッセイ基礎研究所）、西瀬戸伸子（環境庁企画調整局）、林浩二（千葉県立中央博物館）、原子栄一郎（オハイオ州立大学院生）、原田泰（物質工学工業技術研究所）、福田直（埼玉県立自然博物館）、本田恭子（富山）、松本浩一（埼玉県滑川高校）、三好直子（日本ネイチャーゲーム協会）、森良（エコ・コミュニケーションセンター）、渡辺隆一（信州大学）

＜連絡先＞

〒160新宿区三栄町6 小棟ビル201号
エコ・コミュニケーションセンター気付
TEL 03-3341-4910 FAX 03-3341-1453

＜振込先＞

アジア環境教育フォーラム準備委員会
口座番号 00170-0-575693



ネットワーク — 秋の催し紹介 —

(1) 第3回環境教育ワークショップ ～環境教育の週い手を目撃して～

環境教育を実践していくためには、単に知識を教えるノウハウだけでは「心」は伝わりません。環境教育の指導者としてどのような意識、態度を身につけていったらよいのか、実際の指導者から学んでいきます。インタープリテーションの実際ほか、講師：上遠恵子（レイチェル・カーソン日本協会、カーソン著『センス・オブ・ワンダー』訳者）ほか。

日時：10月8日（土）14:00～10日（日）13:00（2泊3日）

場所：東京YMCA野辺山高原センター 定員：50名 費用：20000円

主催、問い合わせ、参加申込：東京YMCA野辺山高原センター

〒384-14 長野県南佐久郡川上村 (☎ 0287-97-2102)

(2) ディープ・エコロジー エコロジカル・セルフ ワークショップ

ディープ・エコロジーの基本的アイデアにふれ、エコロジカルな自己の存在を知り、生命の豊かさと多様性に対する感受性を高め、自らの自己を拡大していくその感覚を養うことが目的です。参考文献：アルネ・ネス「自己実現」（『地球の声を聴く』（ほんの木）所収）

日時：10月15日（土）13:00～16日（日）15:00（1泊2日）

場所：関西学院 千刈キャンプ（兵庫県三田市） 定員：20名

参加費：5000円（食費、宿泊費、その他）他に1000円までの食料持ち寄り

主催、問い合わせ：ディープ・エコロジー・リソース・センター

（担当：藤本晴（とうきほ）、☎ 06-532-3746、FAX 06-536-6895）

後援：聖マーガレット生涯教育研究所

参加申込：上記主催者まで電話またはファックスで（氏名、連絡先（電話も）明記）

(3) 第27回奈良環境教育研究会（10月例会）「環境教育の実践と課題」

秋吉博之さん（兵庫教育大学付属中学校）に新教科への取り組みなどをおはなしいたきます。是非、お誘いあわせのうえ、ご参加下さい。

日時：~~10月18日（日）13:00～17:00~~ 参加費：200円（会場費）

場所：~~橿原公苑事務所（☎ 07442-2-2462）~~（近鉄橿原神宮前駅より徒歩7分）

問い合わせ：奈良環境教育研究会事務局

（本庄眞：〒518-04 名張市富貴ヶ丘 5-276 ☎/FAX 0595-64-7876）

(4) 都市・自然そして未来：今、環境について考える！

チャレンジ・セミナーⅢ（環境教育セミナーⅢ） 大阪府主催事業

講義・実習：22日、本多俊之「環境診断 ～生き物から考える街の環境～」、鈴木善次「身近なことから環境教育を考える」；23日、有馬忠雄「自然に親しむ ～公園で秋を探す～」、赤尾整志「自分をふりかえることから始める環境学習」（日帰り参加可能）

日時：10月22日（土）13:30～23日（日）16:15（1泊2日）

場所：大阪府立青年の家 定員：30名 参加費：2000円（食費、保険料、その他）

参加申込、問い合わせ：大阪府立青年の家（〒618 大阪府三島郡島本町桜井1-3-1：
☎ 075-961-3311）まで電話で、申込締切は10月15日、ただし定員になり次第締切）

④ プロジェクト・ラーニング・ツリー・ワークショップ（PLT）

環境教育トレーナー養成セミナー '94

体験的学習を助ける具体的方法として、アメリカの学校や社会教育で最も広く利用されているPLT(Project Learning Tree: 木と学ぼう)の手法を学びます。20年の歴史を持つ参加型総合学習の手法を学ぶ指導者養成と研修の機会です。

① PLT一日体験ワークショップ

PLTがどのようなものか一度体験してみたい方、自分のフィールドで使ってみたい方のために、テキストを使いこなす最低限必要なことが学べます。

日時：10月23日(日) 9:30~16:30 講師：山本幹彦(京都YH協会環境教育事業部)

場所：京都市宇多野ユースホステル 定員：40名 参加費：7500円(昼食など含む)

② PLT指導者養成ワークショップ

PLTのアクティビティを体験し、グループの中で一度プレゼンテーションをすることで、指導者としてのトレーニングを行います。このワークショップを修了するとPLTアメリカ事務局公認の「PLTリーダー」資格が取得できます。

日時：12月10日(土) 9:30 ~ 11日(日) 16:00 (1泊2日) 講師：山本幹彦

場所：京都市宇多野ユースホステル 定員：30名 参加費：16000円(1泊4食含む)

主催：(財)京都ユース・ホステル協会

後援：環境庁、日本環境教育学会、京都市教育委員会、国際理解教育資料情報センター
問い合わせ、参加申込：(財)京都ユース・ホステル協会 環境教育事業部

(担当：山本、小西) 〒616 京都市右京区太秦中山町29 京都市宇多野YH内

(☎ 075-462-9185、fax 075-462-2289)まで、電話またはファックスで、その後、

所定の申込用紙を郵送し参加費を郵便振替で送る(郵便振替 名義：(財)京都ユース・ホステル協会、口座番号：01000-0-40090)

④ 第7回環境倫理研究会 「自縮との共生」再考

人間と自然との関わりに関して、民俗学のようなフィールド系の学問においてかなりの研究の蓄積があると思いますが、その成果から環境倫理の問題にどのようなことが言えるのか、あるいは言えないのか、一度議論をしたいと思います。報告「水田でコイを飼っていたころのはなし」(安室知)、「環境民俗学の可能性」(篠原徹)の後、総合討論。

日時：11月13日(日) 10:00~18:00

場所：学士会館本郷分館(東大赤門横：☎ 03-3814-5541)

問い合わせ：鬼頭秀一(青森公立大学：☎/Fax 0177-64-1661)、森岡正博(国際日本文化研究センター：京都市西京区) (できれば参加意思を鬼頭氏まで連絡されたし)

関西ワークショップの話題提供者(報告をお願いできる方)を募集しております。また、どのようなテーマでのワークショップ開催が望ましいか、あるいは講演以外にどのような形式のワークショップ開催が望ましいかなど、関西ワークショップに対するご希望なども、関西支部事務局までお寄せ下さい。

関西支部 新世話人募集

日本環境教育学会関西支部は世話人会により運営されています。12月10日に開催されます関西支部第3回研究大会を期し新世話人会が発足するにあたり、新世話人を募集します。世話人は、自主的に申し出た会員にお願いすることになっており、新世話人会は新たに申し出た新世話人と継続の意思を示した現世話人で構成されます。任期は2年を一応の目安にしています。日本環境教育学会の会員であれば、どなたでも世話人になれます。世話人会は月に一度程度開催され（関西ワークショップに引き続き開かれることが多い）、関西ワークショップや支部研究大会の開催、その他の支部活動に関わる決定、通信の編集などにあたります。なお現世話人会は23名の会員で構成されています。関西支部の今後の発展のためには、多数の新世話人の参加が不可欠です。奮ってご応募下さい。お問い合わせは関西支部事務局（連絡先は最終頁にあります）までお願いします。世話人をお願いできる方は、葉書にその旨とお名前、連絡先（住所、電話番号）、さらによろしければ所属団体名（勤務先でも結構です）を明記し、関西支部事務局までお送り下さい。応募の締切は11月15日（必着）です。どうぞよろしくお願い致します。（関西支部世話人会）

関西 ECOMAIL

関西の学会員のみなさまに、ワークショップのお知らせと環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心を持っておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションも広く図りたいと思います。

年間1000円の通信費をいただきましたら、ワークショップの案内とECOMAILを送らせていただきます。

（通信費振込先：日本環境教育学会関西支部

郵便振替口座番号 00990-5-37886）

★ 関西 ECOMAIL への投稿を募集しています。

★ また、ネットワーク欄への情報提供（行事など）もよろしくお願い致します。

関西 ECOMAIL 第23号 1994年9月28日発行

通信費 年間 1000円

編集 日本環境教育学会関西支部世話人会

発行 日本環境教育学会関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室（鈴木善次研究室） 気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1（☎ 0729-76-3211 [内線 3127]）

次回 第24号 1994年11月25日発行予定 原稿締め切り 11月10日